ローマ人への手紙第八六回質問

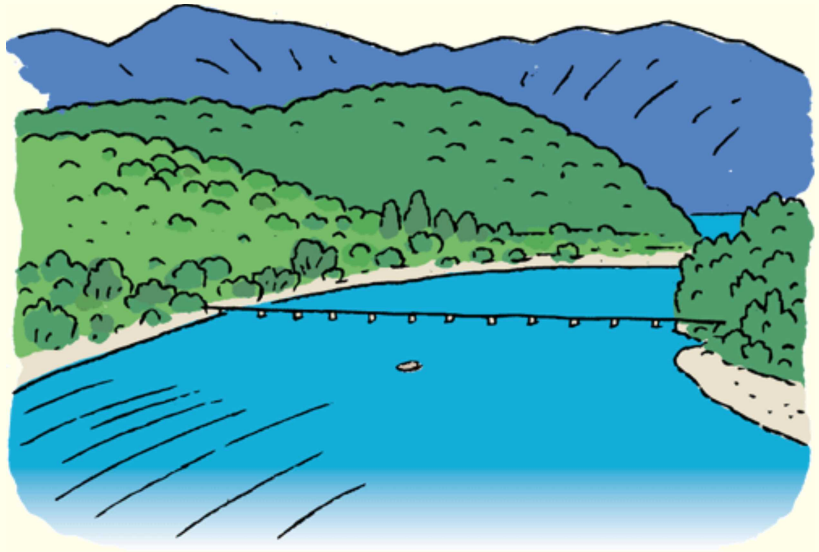
8:3 肉によって弱くなったため、律法にできなくなったことを、神はしてくださいました。神はご自分の御子を、罪深い肉と同じような形で、罪のきよめのために遣わし、肉において罪を処罰されたのです。

（ローマ八章三節／新改訳2017）

（問一）八章三節の「罪深い肉と同じような形」と「罪深い肉と同じ形」ではどのように違いますか。

（問二）御子キリストはどうして、罪深い肉と同じような形でこの世に来られ、私たちを救うためにしなければならなかったことを四つ挙げて説明してください。

（問三）神が私たちのために払われた犠牲がどんなに大きなものであったのかを説明する聖句を挙げて、その意味を説明してください。



神の払われた犠牲

（ロマ八章三節）

前回の時、クリスチャンは、御子をこの世に遣わされた出来事の中に、どんなに大きな神の愛が示されているかを知るべきだと申しました。確かにそうなのです。神の払われた犠牲がどれほど大きなものであったかということを知るならば、

それほどまでにしてわたしたちを愛しておられる神の愛は測り知ることのできないほどです。

ところで、この神の深い愛の証拠について、誤解している人がいることは残念なことです。神はキリストを受肉させたとき、罪ある人間性をとらなければならないほどに大きな犠牲を払われたのだと言い、その証拠として、この個所を引き合いに出す人がいるのです。しかし、この個所だけからでも、そのような教えを引き出して来ることは不可能です。ここでは、「御子を罪ある肉と同じような姿でお遣わしになり」と言っているのであって、「御子を罪ある肉と同じ姿でお遣わしになり」とは言っていません。これは重要なことであり、ニケヤ会議において、アリウスが主張した異端の教えに対して、アタナシオスが弁護した聖書の教理との違いが、ギリシャ語でわずかイオタという一字が入っているか、いないかにかかっていたのと同じです。あの時は、キリストが神と全くひとしいか、それとも似ているかということでしたが、ここでは、キリストが罪ある人間と同様に、罪を持っていたか、それとも罪ある人間と同じような人間性をとったけれども罪は持っていなかったのかという違いです。[1] それは紀元四世紀の教会の死活の問題でしたが、これもまた今日における重大な問題と言えるでしょう。キリストが罪を持っていたという教えは、聖書自身が否定しています。

マリヤが主イエスを胎内に宿す時、御使いガブリエルがマリヤに語っていることばに、はっきりと表われております。マリヤは、御使いの御告げに対して、こう答えています。

「どうしてそのようなことになりえましょう。私はまだ男の人を知りませんのに。」それに対して、御使いは次のように語っています。「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる者は、聖なる者、神の子と呼ばれます。[2]」

また、パウロは次のようにしるしています。

「神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方にあって、神の義となるためです。[3]」

ヘブル人への手紙の記者も次のようにしるしています。

「私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでしたが、すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。[4]」「また、このようにきよく、悪も汚れもなく、罪人から離れ、また、天よりも高くされた大祭司こそ、私たちにとってまさに必要な方です。[5]」

また、ペテロも次のようにしるしています。

「ご承知のように、あなたがたが先祖から伝わったむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物によらず、傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血によったのです。[6]」

このように、わたしたちの主のとられた人間性は、罪を全く持っておられませんでした。しかし、罪を持ったわたしたちと「おなじような姿」であったのです。

すると、どうしてそのようなことが可能であったのかとい

う疑問が湧いてくると思います。マリヤ自身、罪を持っていたのだから、そのようなことは詭弁にすぎないと言う人さえおります。そこで、ローマ・カトリック教会はマリヤの無原罪を主張するわけですが、それはむりなことで、聖書のどこからもそのような教えは出て来ません。それでは、わたしたちはどう理解したらいいのでしょうか。この手紙の八章二九節を見ると、次のように言われております。

「というのは、神はあらかじめ知っておられる人々を、御子の姿に似たものとするために、あらかじめ定められたからである。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためである。」

このことからわかることは、神はキリストにあって、全く新しい民を始められたのです。そのことは、次のように教えられているところからもわかります。

「第一の人は地から出て、土で造られた者ですが、第二の人は天から出た者です。土で造られた者はみな、この土で造られた者に似ており、天からの者はみな、この天から出た者に似ているのです。私たちは土で造られた者のかたちを持っていたように、天上のかたちをも持つのです。」[1]

それでは、キリストはどうして「罪ある肉と同じような姿」でこの世に来られなければならなかったのでしょうか。律法の下にある人間が律法を破ってしまい、断罪されなければなりませんでしたから、キリストがわたしたちを救ってくださるためには、まず第一に、その律法を守られなければならなかったからです。第二に、わたしたちのようにならなけ

れば、わたしたちの罪の罪責を負うことはできなかったのです。第三に、キリストはわたしたちに新しい性質を与えてくださるためでした。「神のご性質にあずかる者となるためです。」[8] 第四に、そのことによって、キリストがわたしたちに深いあわれみを示してくださったのです。そのことについては、ヘブル人への手紙四―五章にしるされています。

神の御子は、ただ単に人間となってこの世に来られただけではありません。もちろん、そのことだけを考えてみても、それは尋常一様のことではありませんでした。そこに大きな苦しみと犠牲があったことは言うまでもないことです。しかし、神の御子は、人間となられて、「その肉において罪を断罪された」のです。神の御子は罪のないお方であって、この断罪された罪とは、ほかならぬわたしたちの罪です。それは、パウロがこの手紙の三章二四―二六節で述べてきたことです。

「彼らは神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いによって、賜物として義とされるのである。神は、このキリスト・イエスを、その血により、信仰によって受けるべき、なだめの供え物として、公けに示された。それは、神の義を現わすためである。というのは、今まで犯されてきた罪を、神はその寛大さをもって見のがして来られたからである。それは、今の時に、神の義を現わすためであり、こうして神ご自身が義であり、また、イエスを信じる者を義とされる方となるためなのである。」

これはまた、ペテロがその手紙で次のように述べていることでもあります。

「そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。[9]」

神がわたしたちのために払われた犠牲がどんなに大きなものであったのかということは、これを知れば知るほど驚き以外の何ものでもありません。それによって、わたしたちは救われたのです。ですから、わたしたちの救いが、どんなに大きな犠牲によってできているかということがわかれば、わたしたちはただそれを受けて、自分だけで満足しているというわけにはいかなくなりましょう。

「キリストがわたしたちのためにご自身をささげられたのは、わたしたちをあらゆる不法から贖い出して、善いわざに熱心なご自分の民を、ご自分のために聖くするためなのである。[10]」

注(1)「同じような姿」(八・三)と訳されたことばは、原語のギリシャ語では、ホモイオーマ(ὁμοίωμα)ということばが使われています。これは、「全く同じ姿」を意味するホモオーマ(ὁμόωμα)とは違い、似ていることを意味します。紀元四世紀に、アリウスがキリストは、神と「似た者」(ὅμοι-οὐσίος)であると言ったのに対して、アタナシオスは、キリストは神と「全く等しい方」(ὁμο-οὐσίος)であると言って聖書の教理を弁明しました。いずれも、ギリシャ語のイオタ(ι)のあるなしで、全く違った意味になってしまいます。これについては、次の書物

を参照。Philip Schaff, History of the Christian Church, III, 120.

(2) ルカによる福音書一章三四―三五節。

(3) コリント教会への第二の手紙五章二一節。

(4) ヘブル人への手紙四章一五節　新改訳。

(5) 同書七章二六節新改訳。

(6) ペテロの第一の手紙一章一八―一九節　新改訳。

(7) コリント教会への第一の手紙一五章四七―四九節　新改訳。

(8) ペテロの第二の手紙一章四節　新改訳。

(9) ペテロの第一の手紙二章二四節　新改訳。

(10) テトスへの手紙二章一四節。

尾山令仁・ローマ教会への手紙講解（ロイドジョンズ・ロマ書講解要約）より